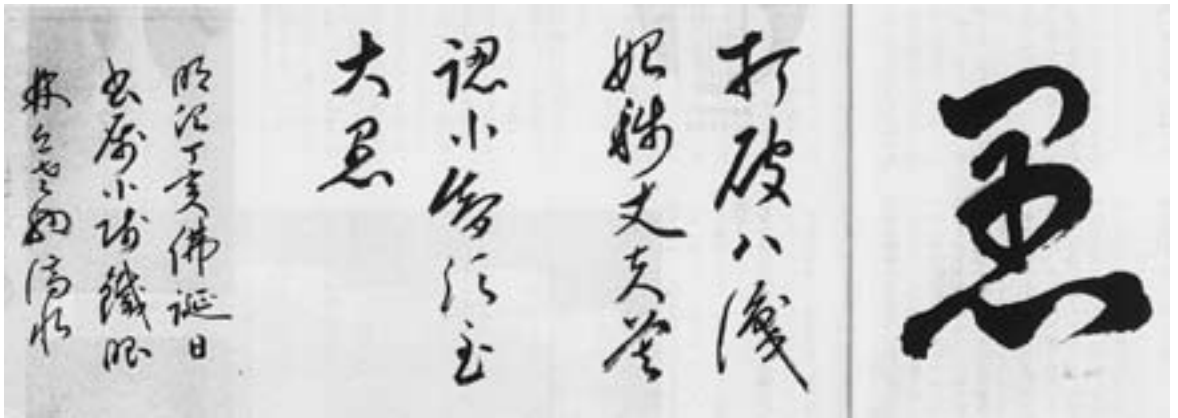

慈 恵



平成26年 秋季号

No.48

宗教法人 慈 恵 院 付属 多磨犬猫霊園



「禅画報」より

愚

八識を打破して始めて
 丈夫と称す
 小智を認めるなかれ
 須(すべから)く大愚に
 至るべし

明治丁亥仏誕日
 書属小師鉄眼
 林丘老衲滴水

山岡鉄舟の参禅

星定せいじょうは幼い時から阿弥陀経をよく読んだ。ある日、経を読んでいくうちに大きな疑問点にぶつかり、どうにも自分では解決できなくなった。そこで、ある僧にたずねてみたが、その僧にも答えることができなかった。星定は、ぜひともその疑団を解決しようと志をかため、輝東庵きとうあんの顧鑑こかん和尚に師事して出家したのである。

この星定和尚の徳風に深く心をよせた者に、山岡鉄舟がいた。

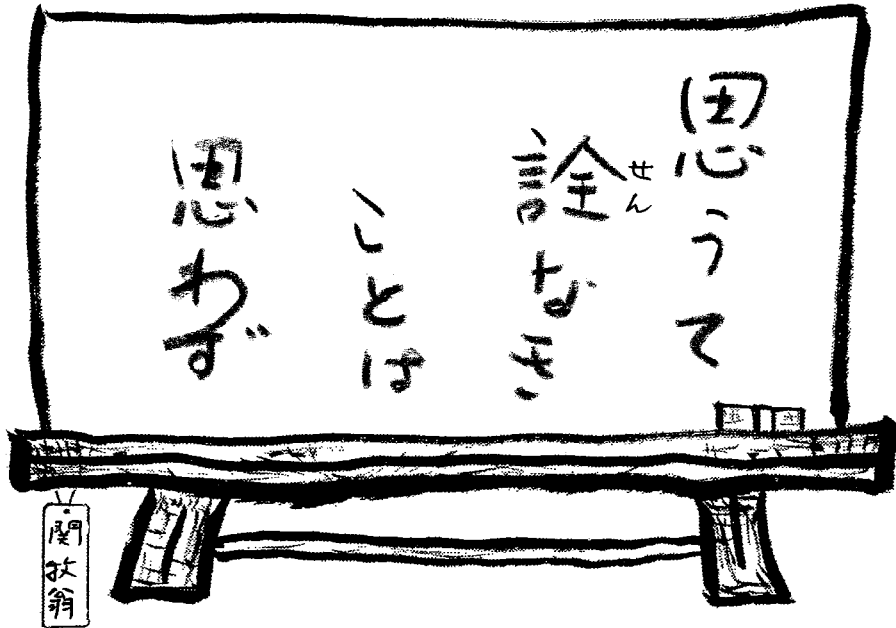
時間をつくつては東京から伊豆へ出向き、龍沢寺にいた星定の鉗けんていをうけた。昼夜を徹して参究にはげみ、夜中になると必ず星定の部屋へきて、麦飯をくい、冷茶を飲んで帰っていったという。

「禅門逸話集成」より

星定せいじょう元志 (二八一六〜一八八一)

臨済宗。尾張の生まれ。十九歳で出家、輝東庵顧鑑に師事し、寂後は通応祖徹に師事して法を嗣ぐ。伊豆龍沢寺の三世。

掲示板





余所さまの 犬が愛犬

小平市
ペンネーム 高島 順風

犬派の夫婦ではあったけれど元来動物好きなので、縁あって猫と18年余過ごした。

戸建ての生活も何かと大変になり、はじめてマンション暮らしをすることにした。

猫は高齢なので、以前から腎臓で動物病院のお世話になっていた。血尿があったり、排便にも手がかかり、老老介護される身ではあった。昔から人伝に犬は人につき、猫は家につくと聞いてはいたが、転居がこの猫に不適であったのか、引越してから67日目

この世を去っていった。二人して慈恵院で、立派な読経をあげていただき葬儀を済ませた。

それからと云うもの、老妻から毎日、毎日、猫との想い出話を聞かされていた。その頃から、散歩の苦手なわたしは近所の買物や、あちこち油売りに歩くようになった。

毎年、盆踊りの櫓の立つロタリー近くに自転車店があり、この店の入口に高さ90cm程の箱の上に、何故かヨークシャテリアの親子が交替で、マスコットのよう座らされていた。狭い歩道に飛び降りるのは危険、すぐ前はバスなど交通量が多い。通行人は気になる、犬好きは頭をそつと撫でる。

若いので三匹がジャレあい、活発に動きまわる。わたしは客と云うより、お邪魔虫で立寄らせてもらった。

店主は商店会の会長が長く、なかなかの風貌。外国映画の二枚目でも、また、反対のボスの役柄も似合うかな。妻君は街のママさんバレーでも活躍。如才がないと云うと失礼。自然な温かいサービスピ精神がある。娘さんにそれぞれ外孫が誕生。お孫さんを連れてくると、寡黙と見える店主が相好をくずして笑顔をみせる。そのさまが素敵だね！妻君に云わせると娘さん達に愛されてきた父親とか。

三匹の犬は日頃、店主夫人の愛情を独占しているせいか、お孫さん達にそそぐ愛情の表現にすこしのジェラシーもなさそう、ひたすら帰宅するのを、じつと待っているかのよう。犬は幸せなんだなあとおもう。

ところが、隔年でこのヨークシャテリアが病死してしまった。二匹は今、慈恵院で眠っている。

残されたハーフの子は、客に慣れて親しい人にはそれ相應の吠え方で歓迎。わたしなど店先を素通りできない程、飛び出して来て吠えてくれるのは、おもいすこす程の愛情を感じさせる。亡くなった犬猫をおもうとき、生者必滅・会者定離を沁々とおもう歳なのだろう。

ありがとう、ハナ

八王子市
ペンネーム 永遠(52)

私とその犬と出会ったのは、今から2年3か月ほど前の事。まだまだ寒さの残る2月の終わり。当時の私は、4年前にクロを失った悲しみからまだ抜け出せないでいて、クロの

首輪と綱を持ってクロと一緒
に歩いた散歩道を一人歩く毎
日だった。その日もそうだっ
た。クロが大好きだった河川
敷の広場に一人ポツンと座り、
川の向こう側を眺めていた。
そうしたところ、一匹の犬が
同じ場所を行ったり来たりし
ているのが見えて、最初は、
近くに人が立っているの放
して散歩をさせているのだろ
うと思っていた。でも、時々
近くを通る自転車の学生たち
が犬に向かって口笛を吹いた
りしていたので、もしかと思
い行ってみたところ案の定：
飼い主と思われたその男性は
私に「捨てられたみたいだ」と
本当に哀れで仕方なかった。

年を取っているようで、聞こ
えるのか、聞こえないのか、
声を掛けても全く振り向く事
なく、ただ同じ場所を行つた
り来たりするばかり。
男性に聞いたところ（飼え
るか否か）アパート住まいの
為、飼えないと言い、私が連
れて帰る事に。勿論、私も年
老いた父と母の世話をしなけ
ればならない為、犬など飼う
余裕などあるはずないが、ク
ロが大好きだった広場で出会
った犬。それも、クロと同じ
くらいに年を取って。きつと
何かの縁。もしかしたらクロ
が：そう言う思いで我が家に
連れてきた。「俺と一緒に暮
らすか」と言つて。綱を付け
て私と共に歩く年老いた犬に。
私はその犬を「ハナ」と名
付けた。五つ年上の兄の突然
の死の翌年から、毎年父と母
の入院があつたりして、暗い
事の多かつた我が家の「花」

になつてくれる事を願つて。
ハナは、とても性格の良い犬
だった。こんな年を取つた犬
を手放さなければならなかつ
たなんて、よほどの理由があ
つたのだろう。如何しても飼
えなくなつた。おそらく10年
以上、大事に育てられていた
のだろう。家族同然に。私も
今まで三度犬を飼つた事があ
るが、やはり自分の飼い犬以
外は、ちよつと怖さを感じる。
なかなか触る事は出来ない。
でも、ハナは違つた。最初、
連れてくる時、私が、してい
た首輪に綱を付ける際も全く
嫌がらず、抵抗もせず一緒に
歩いてきた。それはおそらく
傍から見たら、普通の飼い主
と飼い犬のように見えた。だろ
う。川原を散歩している。
共に暮らしたのは一年三か
月余りだったが、一度も私に向
かつて（家族にも）威嚇するよ
うな吠え方をした事はなかつた。

まあ、最初のうちは、連れて
きたばかりの頃は私が出掛け
て姿が見えなくなると暫く吠
えていたと言うが。でも、お
そらくそれは、自分がまた捨
てられる、置いて行かれると
思つて吠えていたのだろう。
乳腺腫瘍を患つた事もあり、
最後は寝たきりになつてしま
つたハナだが、余り苦しむ事
無く逝つた。それはきつと、
クロの時、余りにも辛い別れ
方だったので、クロたちが、
ハナにはそうさせまいとして
くれたのだろう。二度と私が
あのような思いをしないよう
にと。
明日五月二十六日は、ハナ
の命日。一周忌。ハナには、
改めてありがとうと言いたい。
私の所へ来てくれてありが
とう。私と一緒に暮らしてく
れてありがとう。クロを失つ
た悲しみから私を救つてくれ
て、本当にありがとう。